

《研究ノート》

『ヒュペーリオンの運命の歌』

野村 一郎

周知のようにこの詩は小説『ヒュペーリオン』の末尾近くに挿入されて、主人公が「ein Schicksalsliedを……」と謳っているところから、『ヒュペーリオンの運命の歌』と謳われて有名なものである。

三節から成るこの詩は、内容上は第一・二節と第三節が相対し、先ず第一・二節に無運命な天上の安息が歌われる。

幸をうけた霊たちよ、あなた方はあの高い光の中を

やわらかい土をふんで はずかに歩む。

光り輝く神々の風が

かるやかにあなた方にふれる、

伶人の指が

神聖な絃にふれるように。

眠っているみどり児のように

運命なく天上の者たちは息づく。

つつましい蕾の中に

きよらかに守られて、

彼ら神々には永遠に

精神の花が咲く。

幸をうけたその日は

静かな永遠の

明るさの中に輝く。

ここに使われることばは、Knospe, Säugling という名詞、selig, leicht, mensch, ewig, still という形容詞、動詞は wandeln, rühren, schlafen, atmen, blühen 等、詩句全体のひびきもゆるやかに、静かにたゆたう感がある。そして内容上中心をなすものは第二節冒頭の schicksallos である。

これに対する第三節は急転して激しく、いたましく、歎きつつ落下する。ひびきも鋭く用いられる動詞 schwinden, fallen, leiden, werfen は流転動揺を示す。

しかし われらに与えられているのは

いずこにもやすらい得ないさだめ。

苦悩する 人間たちは

消えてゆく 落ちてゆく、

盲目的に 時刻から

時刻へ、

ちようど 岩から 岩へ
 投げつけられる 水のように、
 たえず あてなく 落ちる。

はじめにある安らかな充足に対し、変転きわまりない人間の運命が鋭く対立されているようである。恍惚境を地上に求めることはできず、人間は運命に鬪弄されるまま底もなく落ちてゆく。ここには救いなき悲歎が歌われているようである。それはまた詩人ヘルダーリンの運命でもあった。

しかし、それは救いのない絶望の歌であらうか？

この詩をひびきゆたかな原文でくりかえし読んでみよう。すると、とりわけ心を打つのは第三節の激しい調子であるが、それは悲歎に終始するのではなく、その悲痛きわまりないひびきはむしろ強者のものである。真に自己を知り悲痛の叫びをあげることができるのは強者だけであって、弱者は悲痛の叫びをあげることはできない。「されどわれらには与えられている」、この句にはさげ得ないものに立ち向う雄々しきがある。落下する水は運命に鬪弄される人間以上に、運命を避けぬ英雄、さらには運命そのものである人間の荒々しさである。それについては後に述べるであらう。

一般にヘルダーリンの詩では、河流はしばしば「大いなる海」へ向う。しかもこの「大いなる海」はただ流れつく終点であるばかりでなく、水の起点、「源泉」でもあって、この海への還入は、『ヒュペーリオン』が生れ出た源「自然」への還帰を

根本主題としているのと相通する。この詩では「岩頭から岩頭へ投げつけられる」というすさまじい表現がされるのであるが、Guardini はそのたぎり落ちる溪流の中に「彼の本質に従って深みへ下降しようとする生命」を見ている。われわれはその生命のあらわれに打たれるのである。

先ず「無運命」とこのような「生命」から考えてゆこう。

第一・二節は完成された神々の世界、理想の世界であるが、同時に、「眠っているみどり児のような」「世界は太初の世界、まだ世界とも呼べぬ原始の状態である。小説では「幼児の安息」は「天上の安息」であり、「掟と運命の強制は幼児にふれず」

「幼児は生の窮乏を知らず、死について何も知らぬがゆえに不死だといえる」(Hy. I 13) ののである。このような人間太初の状態は、前稿体の一つ『ヒュペーリオンの青春時代』では「純粹精神」と呼ばれる。フィヒテの影響のまだ強く残るこの前稿体は観念的ではあるが、「安息」と「生の窮乏」「苦惱」についての基本的な考えがあらわれている。「よき人」と呼ばれる賢者は説く。

「われ／＼の精神が天上の者たちの自由な飛翔から迷い出た時、……愛が生じた。それはアフロディーテが生れた日に起ったことだ。われ／＼のために美しい世界が始った時、われ／＼には生の窮乏が始った。われ／＼が昔仄なくあらゆる拘束をまぬがれていたとするならば、われ／＼は純粹な精神の特権たる自足を失うこともなかったであらうが。われわ

れは生の感情、明るい意識を神々の悩みなき安息ととりかえたのだ。もしできるならば、純粹精神というものを考えて見給え。それは素材とは関係がない。……それは全でありそれゆえにそれ自体無である。純粹精神は望むことができぬから、欠乏に苦しむことはない。それは悩むことはない、というのは生きていないからである。(「圈点筆者」)(St. III 201f.)

まだ分裂を知らぬ幼年時代は小説『ヒュペーリオン』だけでなく、ヘルダーリンのいくつもの詩にさまざまのことで歌われ、なつかしい憧れの対象になっている。しかし人間はこの未発の状態にとどまることはできない。われわれは先ずここに引用した「純粹精神」を手がかりにしてよく考えてみよう。

「純粹精神」が欠乏を知らず自足しているのは願望できないからであり、悩みがないのは生きていないからである。それは生がなく、従って死もない。生の感情を知らぬのである。『ヒュペーリオン』完成体の「幼児が不死である」のも「死について何も知らぬから」、ひるがえしていえば生の感情もないのである。それは schickellos, zeitlos, ortlos である。しかし、人間が生に感情を得、明るい意識を得れば、神々の境地「悩みなき安息」を失わねばならぬ。けれども「生の窮乏」を知る時、つまり「生の感情」を知る時「愛」が生じ、「美しい世界」も始まる。詩の第二節で「精神は雷の中に守られて」いるが、「雷」はやがてひらくことを予定されるものである。「雷」は花ひらく「美しい世界」の予見でもある。しかし美、アフロディーテの生れた時は生の始まった時である。『運命の歌』は運命なき

神々と運命ある人間の深刻な対立を示す、とはよくいわれることである、なるほどそうであるが筆者はその対立を簡単に考えることはできない。第二節にはやがて運命をになうべきものが雷の状態にある。眠っている嬰兒は目ざめなければならぬ。

ところで「明るい意識」を得ることは、われわれが弁別、識別を知ること、分つことを知ることであり、ここに分裂も生ずる。だからわれわれは「生の感情」において喜びだけでなく、窮乏苦悩も感ずる。生死を分つことを知り、生と同時に死をも知る。人間は詩の第三節の「苦悩する人間」になるのである。

しかしそれは生の自覚なのであって、それとともに愛も生ずる。生の感情とともに生じた愛はまた苦悩をともしなうものであるが、愛は美とともにあることも忘れてはならない。こうして人間は運命をになうようになり、時と所を得る。つまり人間には「全」から「個」が生じ、人類には歴史が始まるのである。

それゆえに、「神々の悩みなき安息」を失ったことは、失ったものが忘却の彼方に消え去ることではない。De Beer は「この失われたものがさらに現存在の中に——再び追求されるべき理想として、ないしは、なおほるか遠くにおいて現に存し人間の憧れの向けられる原型として——力強く残っている様に理解しなければならぬ」といっている。人間はその理想を求め、その生れ出た神聖な境地にあこがれ、そこへ帰りたいという強い衝動をもつようになる。こうして人間自身のうちに、この『運命の歌』に見られるような神聖と人間的、無運命と運命、天上的と地上的の対立があらわれる。しかしこれは対立という

よりは相互に志向し合うもので、詩『人間』では「人間の中には大胆に、比類なく、父（なる太陽神）のけだかい魂と（母なる）大地の喜び悲しみがもともとひとつになっているのだ」（第五十六節）といわれるのである。

ヘルダーリンは「運命」を歌うのにも先ず、うっとりとした神々の境地を歌っているが、これは注目すべきことである。それは今まで見てきたように、人間が運命をもつ以前の、最初の状態がそうだったからでもあるが、そもそもヘルダーリンは理想となるべき恍惚境なくただ人間生活の泥沼だけを歌うことはできないのだ。Wentzlaff Eggbertはヘルダーリンの運命観を、「運命」と「根源」の両概念から説明しているが、われわれもまた「運命」をただ「運命」の面からだけ考えることはできない。一七九八年作の『人間』には

……人間は、神々の母、すべてをつつむ自然とひとしくあろうとする。(第六節)

あゝ、それゆえに、大地よ、人間はその大胆さにかり立てられて、おんみの心からかり出され、おんみのおくり物も、やさしい絆もむだとなり、人間というこの荒々しい者はもつとよいものを求める。(第七節)

「荒々しい者」人間が、「時刻から時刻へ」「岩から岩へ」未知の闇の中へ落ちてゆくのは、「よりよいもの」を求めてのことである。盲目的な人間は不確定の中へ落下していくけれど

も、「もつともよいものは、大海の底の真珠のように、いつもただひとり深いところにやすらっている」(Hy. II 48) かも知れないのである。『運命の歌』では、「苦悩する人間たち」は上昇なく落ちてゆくだけであるが、その落下もまた『人間』の「よりよいもの」を求める衝動にかられていることである。一方その「よいもの」の原型は第一・二節に示されている。『運命の歌』は三段階構造をとっていないので、第一段階の原始の調和と第二段階の離脱・分裂が示されるだけで、第三段階の帰還は示されていない。しかし運命のまにまに下降することは、神への道を上昇すること、帰還と無関係ではない。『タリリア断片』の「離心円軌道（ないしは楕円軌道と訳すべきか）」ということばが示すように、ヘルダーリンの思想には天文学的な宇宙観も混入しているが、そのような考えを發展させ宇宙を大いなる円球と見なすならば、そもそも絶対的な上昇と下降があり得るだろうか。一方的に下降の道をたどって終るのでもなく、上昇の道だけをたどるのでもない。下降はもともと「すべてをつつむ自然とひとしくあろうとする」欲求、「よりよいもの」「美しいもの」を求めようとする「大胆な」衝動に発して、母の心から迷い出たものであってみれば、下降の極は上昇に転ずるように思われる。しかしまた上昇は高ければ高いほど激しい危険をとまなう。この詩にはまだはっきりした上昇はなく、上昇にともなう危険の自覚もないが、『ライン川』第八節では、自らは感ずる力のない神々の代理として感じ、それをつたえる半神の使命と、同時に、分を忘れ「人間の運命をしのぼうとし

ない者」に下る神々の裁きが歌われるようになる。

さてここで注意したいのは、以上述べてきたことを、「純粹精神」という觀念にとらわれるあまり、神々の境地が人間の苦闘より価値の低いものであるかのように思ったり、またこの詩の第三節が単なる絶望の声ではないと強調することから、「運命」を安易に考えるようなことがあってはいけないということである。『運命の歌』に凝集されたものを小説『ヒューリオン』に求めるならば、われわれはいたるところにそれを見出し、全巻ごとごとくそれを叙しているときえいえるくらいである。また詩人自身の生涯——最後の狂疾期を除いては安住の地のなかった生涯——を思うならば、たとえば「いずこにもやすらい得ないさだめ」の一句も無限の悲しみをおびてくる。それゆえ、限られた紙幅の中では概括的叙述に流れるのも止むを得ないが、できる限りその点に目を向けて見よう。

Wenzlaf-Eggebertによると、テュービンゲンを出る頃までのヘルダーリンの運命観には特にいうことはない。いわば「無運命」の時期である。詩『運命』(1793~4)では「運命」と「苦難」は同義であるが、九六年、すなわちズゼッテを知ってから次第に運命に対する考えが変化し、その運命観から受動的態度が消え、ディオティーマ体験の中に新たな「無運命」が花ひらく。そして後期讃歌、とくに『ライン川』に国民に対する詩人の使命が問題となってくる。

筆者が小説『ヒューリオン』について検討したところで

は、「運命」ないしそれを感じさせる語はいたるところに見出され、その意味するところも、たとえば「苦難」「苦しい生涯」のような意味から、超越的、内在的なものとしてとらえられるなど、さまざまである。しかし第一巻(1797出版)にくらべ第二巻(1799出版)になると Schickel という語の使用回数も多くなり、かつそれが重みをもって使われることが多くなる。そしてヒューリオンが『運命の歌』を歌うのはいわばその頂点に達する時である。

一方このころの詩人の身辺を考えると、すぐ頭に浮ぶのは一七九八年九月下旬のズゼッテとの運命的な別れのことである。筆者の知る限りでは『運命の歌』成立の時を正確に断定できないので、この別れがこの詩の直接の成因だと断ずることはできないが、いずれにしてもこの時期にかけて彼の「運命」についての考えは熟しつつあった。書簡の中にも「わたしは運命を尊敬することを学び」(Br. 151 義弟あて 1798. 1. 10.)「たとえ不幸の中にあってもほくは運命を愛する」(Br. 163 ノイファーあて 1798. 8.)という注目すべきことがある。そしてその後彼自身の運命はこの別れを経ていっそうきびしいものになっていくのであるが、ディオティーマリズゼッテとの別れは当時の彼の運命に一つの頂点をつくり、その後の彼は詩『故郷』にみられるように、地上の子は愛するように生れつき、その悩みは神々の与えた聖なる悩み、そして「神々は運命の賦与者」となる。

ヘルダーリンがゴントルト家を去ったのは表面的には唐突の感を与える。そのためその動機が興味の対象となり憶説も生

れるのであるが、筆者にはこの別れが突発的なものとは思われないのである。「誘因と経緯よりもさらに重要なのは別れの真因」(St. VI 88)である。母にあてた説明(Br. 165)によると「あらゆる学問教養に対する毎日のような故意の誹謗」「教師もやはり召使で、その仕事には金を払っているのだから何も特別のことを要求できぬはずだ、ということば」などがたえず彼を傷つけ、「口にはいえぬくらい」仕事が妨げられたのである。それが彼を去らせた一因であることは疑いない。それは、彼が詩人の使命をにないながら、生活の資のために苦んだという、生涯背負った運命の一つのあらわれでもある。しかしゴントアルト氏からうけた侮辱だけが別れの真因なのだろうか。彼はフランクフルト最後の日々のことを、「……だがぼくは、ぼくの悩みを自分自身にも隠していた。もしそれをいおうとしたら、魂も涸れるまで泣きに泣かねばならなかったろうよ」(Br. 169 弟あて 1798. 11. 28.)と書いてゐる。そのような深い苦悩の原因はただゴントアルト氏の態度だけだったであろうか。

一七九九年『ヒュペーリオン』第二巻が出た時、ヘルダーリンはズゼッテに――

「わたしの最愛の愛、あなたへの思いさえも時にはこれをしりぞけ否定したのでした。それはただ、できるだけおだやかに、あなたのためにこの運命を生きぬくためでした。あなたも、あなたもまた落ちつきをたもつためにいつも努力し、英雄の力で耐え忍び、何ともならぬことはじっと沈黙し、あなたの心の永遠の選択を内にかくし埋めていましたね。それ

でわたしたちの前はしばしば薄明だったのです。」(Br. 198)

「自分自身にも隠していた悩み」とはこのような思いであつたらう。彼らは心の内でもっとも深く愛し合いながら、口にすべからざることをじっと耐えていた。同書簡にはまた、「さあ、わたしたちのヒュペーリオンです。……ディオティーマが死ぬことをおゆるし下さい。……全体的構成からするとこれが必然的であろうと思つたのです」とも書いてゐる。ヘルダーリンは現実のズゼッテとの「必然的な」別れを予見していたに相違ない。そして現実の彼はこの別れの後、「いずこにもやすらうところない」「不現実の中へ」の半ば放浪の生に入るのだが……。

小説ではヒュペーリオンはディオティーマとの美しかった日々を回想していう――

「われ／＼自身の至福もまたこのように過ぎ去ることになつていたのであらう。わたしたちはそれがもう予見できていた。

おお、ベラルミン！ いったい誰が自分こそ確乎として不動だといえよう。美でさえその運命に向つて熱していき、神的なものでさえ己れを屈し死すべき定めの人間とその無常 *Serthickert* を分たねばならぬというのに。」(Hy. II 5)

小説のディオティーマは死ぬのである。時空を超え現身の姿を超えた再会を信じながらも、死という形の別れをとるのである。ここで『運命の歌』をかえりみると、たとえばディオティーマを叙して「かすかに、あたかも蕾のほころびるように、そ

の愛らしい顔は天のそよ風の前でほほえんだ」(Hy. I 97) というような表現はただちにこの詩の第一・二節を思い起させる。

その第一・二節と第三節の対照は、また、小説におけるディオティーマの安息とヒュペーリオンの窮乏の対照でもある。その「生の窮乏」は愛の悩みと表裏一体のものであるが、窮乏を天上の安息充足へ転ずるものは「感激」であり、そのような感激の力を最も發揮するものもまた愛である。けれども、そのような神なるものでさえ無常の運命をうけねばならなかった。小説ではヒュペーリオンの『運命の歌』を歌う時、ちょうど一隻の小舟がディオティーマの死の知らせと、彼女のいまわのきわなことはをたずさえて入港するのである。

ヘルダーリンとズゼッテの別れはこのような意味で運命であった、が、筆者には別れだけでなく、愛そのものが運命だと思われる。別れも愛も、人間自身の内にひそむものなのである。そのような意味で運命である。アダマスとの別れを想起するヒュペーリオンのことばをきこう。

「……われ／＼がどのように富んでいても貧しいのは、われ／＼が一人ではあり得ないからだ、われ／＼が生きている限り、われらのうちの愛は死滅しないからだ……。

何人も運命がわれ／＼を引き離すといってはならない。われ／＼なのだ、われ／＼こそ未知という闇の中へ、どこか他の世界の冷たい異質の中へ落ちて行きたいという気持になるのだ。」(Hy. I 25)

『タリーア断片』の「離心円軌道」ということばの中には宇

宙の引力と遠心力が暗示されているが、人間自身のうちにも相引く力、和合を求めるねがいと、同時に、離れ去る力、愛のさ中からさえ身をもぎはなし暗い未知の孤独の中へ落ちゆくこととする衝動がある。ヒュペーリオンは再三再四この衝動にかられて傷つくのであって、『運命の歌』の落下もまたこのような衝動にもとづいている。しかし、分離・落下の衝動と、合一・安住のねがいは、もともと相反するというよりは一つのものの両面であって、未知の闇へ落ちゆく衝動の反面、「われらのうちの愛」が死滅することはない。ヘルダーリンは「われらの内なる神」ということはよく使うのであるが、その神は「小川のように運命をみちびく」(Hy. I 27) 盲目の衝動は「内なる」力にみちびかれ、さきに詩『人間』でみたように、「よりよいもの」を求めているのである。ヘルダーリンは深い苦悩の中でもそれを信じている。一七九八年七月、弟にあてて彼は書いている。「今もまだ、はくは深く深く苦悩している。けれどもはくはこう思う、はくはある最もよいものはまだ滅びなかったのだ。」(Br. 162)

(1) Romano Guardini: Hölderlin. S. 38.

(2) Wolfgang de Boer: Hölderlins Deutung des Daseins. S. 27.

(3) F. W. Wentzlaff-Eggebert: Die Erfahrung von Ursprung und Schicksal in Hölderlins Lyrik (1795—1801).

(4) Wolfgang Schadewaldt: Hölderlins Weg zu den

Göttern.
なお文中に使った略号はたとえば、
Hy II 48 Stuttgart 版の表示による “Hyderton” の第二
巻四八ページ。

St. III Stuttgart 版全集第三卷二〇一ページ。
Br. 151 Stuttgart 版全集第六卷の書簡第一五一番。
(一橋大学非常勤講師)